

- 心身ともに健康で明朗な生徒
- 自主的に学習する生徒
- 責任を重んじ協調性のある生徒



令和4年3月10日(木)発行

【発行責任者】郡山市立小原田中学校長 熊坂 洋

# 手をたずさえて

**君が小原田中の“一員”であることにプライドをもてたなら、それは、君が君であることのプライドにもなるはずです！**

3月7日(月)昨年度と同様、「もうひとつの卒業式」として『お別れの会』が行われました。

3学期がスタートした頃は、今年度こそは、全員揃っての卒業式が実現できるだろうと考えていました。しかし、残念ながらその想いは叶わず、3年連続で縮小の卒業式となりました。この『お別れ会』は、11日の卒業証書授与式に出席できない在校生が卒業生に感謝の想いを伝える場です。同時に、卒業生から在校生に自分たちの想いを託す場でもあります。昨年度同様、今年度の『お別れの会』も、小原田中らしい心温まる会になりました。会の準備や運営に心を尽くしてくれた生徒達に感謝します。

まずは、在校生から卒業生へ。1年生から卒業生に感謝の言葉が述べられ、1年生全員で『パプリカ』のダンスを披露しました。2年生からは、部活動ごとに3年生への感謝の言葉の発表がありました。その後、在校生全員で『花束』を合唱しました。マスク着用での合唱でしたが、気持ちのこもった素晴らしい合唱が披露されました。さらに、1・2年生の新しい応援団メンバーにより、卒業生へのエールが送られました。



生徒会から卒業生に記念品贈呈(校名入りボールペン)があり、卒業生から在校生に対するメッセージと教室に飾る花が贈られました。さらに卒業生から我々教職員にも花束とメッセージカードが贈られました。そして、卒業生からの返礼として、3年生の応援団メンバーが在校生へエールを送りました。その演舞はさすがでした。会がピリッと引き締められました。その後、卒業生が卒業証書授与式でも披露する『旅立ちの日に』を合唱しました。

最後には、『輝くために』の全校合唱が体育館に響き渡りました。全校生の心が見事にひとつになりました。感染症対策として制限を受ける中、少ない練習時間で工夫しながら取り組んできた合唱です。卒業生、在校生とも2曲ずつをしっかりと歌い上げることができました。そして、校歌で最後を締めました。



小原田中生の君が小原田中の一員であること

この意味を見出すのは、君自身です。君が、小原田中の一員であることにプライドをもてたなら、それは、君が君であることのプライドになるはずです。この『お別れの会』でも、“小原田PRIDE”を体現することができたと思います。



# 東日本大震災 から11年

## 日本、そして世界に思いを馳せる

「3月11日 金曜日 卒業証書授与式」…奇しくも11年前と今年度が同じシチュエーションとなりました。明日3月11日で、あの東日本大震災から11年が経過します。地震や津波等による大きな被害に加え、放射能という“見えない敵”との戦いは未だに続いています。復興が進む中、自分の故郷に帰還できない方々も数多くいます。40年かかるとされている福島第一原子力発電所の廃炉までの道のりには、乗り越えなければならない高いハードルがたくさんあります。原発から発生している汚染水の問題もあります。「復興」という言葉のかけに、今でも苦しんでいる人たち、難問に直面している人たちがまだまだたくさんいるということは忘れてはならないことです。そして、“見えない敵”と言えば、未だ収束をみない新型コロナウイルス感染。さらに、今、この瞬間にも犠牲者が出ているウクライナ問題。テレビでは連日リアルな映像が流され、ウクライナの人々の悲しみと怒りの姿、避難する女性や子どもの涙、大切なものを次から次へと失っている状況など、心が痛むばかりです。こういったギスギスしたニュースが多い中、震災11年目を迎えようとしています。悲しくつらい出来事も時間が経てば、記憶も薄れていきます。我々は“福島人”として、あの震災と原発事故を風化させてはならないということ、今日ここで再確認したいと思います。本来であれば、3月11日午後2時46分に黙祷するところですが、その時間は卒業式の卒業生退場の時間に重なります。したがって、本日〔3月10日（木）〕全校生で祈りを捧げ、思いを馳せたいと考えます。（「思いを馳せる」とは、遠方の人や物事などに思いをめぐらせること）哀悼の意を示すとともに、命の大切さ、思いやり、絆、貢献、畏敬（いけい）の念、さらには、危険回避能力など、今の自分の状況を様々なことに結び付けながら考えていくことも大切です。そして、ウクライナの人々にも思いを馳せたいと思います。【黙祷】

### 1000年後の命を守るための取り組み 宮城県女川町

東日本大震災で大きな被災地となった宮城県女川町。震災の直後、80%以上の家屋が流失し、多くの家族が行方不明のまま女川一中に入学し、瓦礫の中で中学校生活をスタートさせた64名の生徒達。自分達が経験した辛く、悲しい出来事を二度と繰り返したくないと願い、「1000年後の命を守るために」を合言葉に、中学校の社会科の授業を通じて「津波の被害を最小限にする3つの対策案」を考え、様々な取り組みを実行してきました。町民同士の絆を強くし、もしもの時に助け合うための避難訓練を実施したり、津波が到達した最高地点を語り継ぐために、町内の12カ所に『いのちの石碑』を作ろうと考え、自分たちの呼びかけで1000万円もの募金を集めて石碑を建立したりするなど、強い想いを胸に根気強く自発的な活動を続けてきました。

#### 『いのちの石碑』

2013年11月23日に1基目の石碑が完成し、2021年11月22日は、当初計画していた21基目の石碑を建立することができました。全ての碑には災害への備えとして「非常時に助け合うため普段からの絆を強くする」「高台にまちを作り、避難路を整備する」「震災の記録を後世に残す」との文字が刻まれている。

また、21基目の碑文には1基目と同じ「夢だけは 壊せなかった 大震災」という句が使われています。現在は社会人や大学生になった約10人が中心となり各碑文の前で語り部活動を続けています。



そして、高校生になった彼ら彼女らは、今度は女川町以外の人々の命を守るための『女川のちの教科書』作りを本格的に始めました。震災から得た様々な経験、その後勉強した様々な知識を、学年ごとに学びを深めていける教科書としてまとめようと考えたのです。それぞれが違う高校に通いながらも、



毎月2回ほど集まったり、冬休みには合宿まで行ったりしながら教科書の編集作業を続けてきました。高校時代を通じての会合は104回に達しました。2017年には中学生向けの教科書の第一弾が完成しました。現在メンバーは学生や社会人となっていますが、今も教科書作りを続けているそうです。

64名の中学生達から始まったこれらの動きは、「命とは何か」という人間としての根源的な学びから始まり、よりよい社会づくりに貢献しようとする活動へと発展していきました。“心の復興”を象徴する素晴らしい取り組みです。